

公立中学校および適応指導教室における チェックリスト運用体制の開発 I

— 職場体験および特別活動の体験活動の充実感, メンタルヘルス・チェックリストを中心に —

北神 正行 ・ 高木 亮* ・ 山崎 克磨** ・ 原 範幸***

本研究は中学校および適応指導教室の生徒を対象としたメンタルヘルスと体験活動の充実感を測定可能なチェックリストを作成し, その運用体制に必要な議論を行うことを目的とする。現職教師ら合計10名とともにメンタルヘルスと体験活動充実感のチェックリストを作成した。2006年度に中学生の職場体験活動の評価として111名, また適応指導教室の体験活動後の振り返りとし, のべ108名分のデータを得て分析を行った。その結果, 体験活動充実感・チェックリストの得点が高ければメンタルヘルス・チェックリストの得点が改善される傾向が中学校と適応指導教室それぞれで確認された。また, 体験活動充実感, メンタルヘルス両チェックリストはいずれも適応指導教室群の方が中学校群よりも難しさのある回答の得点分布を持つことが確認された。そのため, 適応指導教室群の得点分布を参考に不登校等のリスクが高まると考えられるチェックリストの危険域の存在が示唆されるとともに, メンタルヘルスだけでなく適応指導教室の一部通所者の軽度発達障害へのフォローと, 今後教育現場にとって経済的・労力的にコストが低く利用できるチェックリストの運用方法を議論した。

Keywords: メンタルヘルス 特別活動(体験活動) 進路指導 学校・教育評価 発達障害

はじめに

本研究の目的

平成18年度に岡山県教育センター(現, 総合教育センター)委託SSN(スクール・サポート・ネットワーク)事業において適応指導教室における「体験活動の評価方法開発のための研究」が実施されることとなった。また, 平成18年度岡山県のY町立Y中学校の職場体験活動の「職場体験およびキャリア教育の調査研究」が実施されることとなった。いずれも, 生徒(適応指導教室においては一部高学年の児童を含む)の体験活動の充実感と学校・施設に

おける心理的健康状態を量的に測定し, その統計的関係の議論と今後の教育実践への貢献方法を提示することが求められている。

しかしながら, わが国の先行研究を見る限り児童生徒のメンタルヘルスやストレス反応を測定する研究は多くが研究目的の中で一般的な理論を模索するために作成された「尺度」が中心である。日常の学校や適応指導教室(以下, 両者を併せて指す場合は「教育現場」と称する)での利用は一部の例外的な研究を除いて考慮がなされていない。そこで, 本研究はSSN事業およびY中学校の体験活動調査研究

岡山大学教育学部教育学講座 700-8530 岡山市津島中3丁目1-1

Development of System of Checklist Operation among Junior-high School and Pubic Institution for Non-attendance at School.

Masayuki KITAGAMI, Ryo TAKAGI*, Katsuma YAMAZAKI** and Noriyuki HARA***

Department of School Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

*Joint Graduate School in the Science of Education, Hyogo University, 942-1 Shimokume Yashirochoe Kato Hyogo 673-1494

**Department of Educational Guidance, Okayama Prefectural Educational Center, 7545-11 Yoshikawa Kibit-yuuou, Kaga, Okayama 716-1241

***Yakage Junior-High School, 2-957 Yakage, Yakage, Oda, Okayama 714-1201

期間である平成18～19年度の間に、①中学校学齢期の年代を主として対象とした特別活動の中で特に体験活動の主観的評価とメンタルヘルスの状態を量的に測定しうる「チェックリスト」を開発すること、②その結果を考慮に入れた学校現場で利用可能で有益な情報としてフィードバックの方法を考察すること、③教育現場にとって経済的・労力的にコストが低い評価体制の開発を模索すること、の3点を目的とした。

先行研究のレビューと仮説の設定

(1) メンタルヘルスの測定の課題

小・中学生を対象とした心理的な健康度を測定する尺度は多様なものが蓄積されているが、心理学の一般理論研究の目的から作成されているため教育現場での利用のしやすさをあまり意識していない⁽¹⁾。その中で例外的に岡安・高山(1999)の作成した「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)」は中学校での教育実践に利用されている実用性を重視したチェックリストである。そこでは、理論的・統計的妥当性が検証されているだけでなく、学校現場での実施も考慮におき得点の安全域と注意域を弁別できる得点の標準化されたパーセントスタイルも設けている。これにより教育現場としては情報として活用しやすいフィードバックを具体的に得られるという特長がある。

しかしながら、この「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)」においても岡山県下に関するかぎりは教育現場での利用は現場より難色を示される場合が多い。その理由は項目数が50項目近くにわたるため項目内容間に類似・重複が感じられるなどの「項目が過剰に多い」、「しつこい」印象や、構成する項目において「誰かに怒りをぶつきたい気持ちがする」などの反社会的態度・行動や「何もしたくない気分になる」などのイライラ感や非社会的態度・行動を誘発させかねないと現場の教職員から感じられている点が挙げられる⁽²⁾。そのため、これらの現場の意見を参考としつつも独自の岡山県版「メンタルヘルス・チェックリスト」を作成することとした。

(2) 体験活動の充実感測定の課題

体験活動自体が児童生徒の心理的に与える望ましい影響についてはキャンプなどの参加を通じた心理的变化に関する検討がなされている。例えば、キャンプの参加により不安を示しやすい性格特性の改善が示唆された知見(飯田・井村・影山, 1988)や、体験内容を通して他者との協力や、挑戦・達成への前向きな姿勢、コミュニケーションにおける自己開示、自らの内面に注目する傾向などが育まれること

も明らかにされている(西田・橋本・柳・馬場, 2005)。特に西田ら(2005)は運動・スポーツによるメンタルヘルスを促進する充実感を「エンジョイメント尺度」として作成し、組織キャンプ体験におけるエンジョイメントの高さがメンタルヘルスに与える望ましい影響を共分散構造分析で検討している。そこでは、組織キャンプ体験における自然とのふれあい体験や他者との協力体験、挑戦・達成体験などは直接メンタルヘルスの変容には影響はなく、活動の充実感であるエンジョイメントを通してメンタルヘルスの変容に影響を与えることが明らかにされている。つまり、体験活動で様々な体験を行うことや参加することだけでは心理的变化につながらず、その活動自体に充実感が感じられなければ心理的な望ましい変化にはつながりにくいことを指摘している。

西田ら(2005)はあくまでキャンプなどを想定している。そのため本研究はこれを参考に学校の教育課程などにおける体験活動の充実感を測るチェックリストを作成し、この職場体験活動における充実感がメンタルヘルスに与える心理的影響を検討することとした。あわせて、それを教育現場にとって有効にフィードバックする方法を検討することとした。

(3) 研究仮説モデルの設計

メンタルヘルス・チェックリストについては岡安・高山(1999)を参考に、体験活動充実感・チェックリストは西田ら(2005)を参考に作成する。それをもとにSSN事業における2年間での研究ロードマップを図1にまとめた。

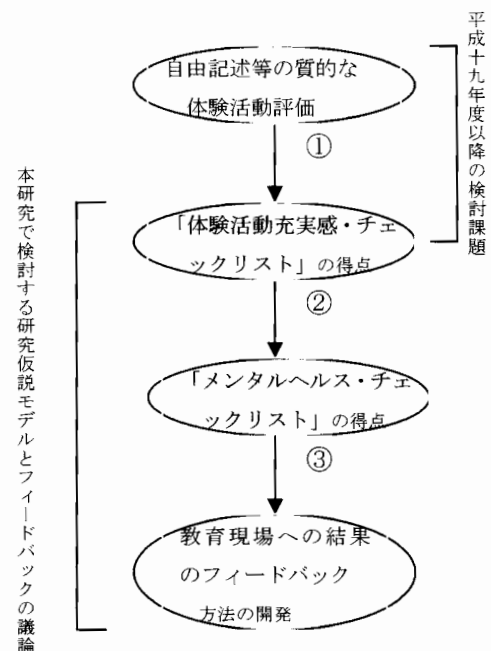


図1. 研究仮説モデルと実践方法の見通し

従来、適応指導教室およびY中学校職場体験活動後には作文や感想文形式で生徒自身が結果を振り返るとともに、それを教職員がまとめる中で教育課程の経営評価的に扱われてきた。そこで、今回の研究ではこの感想文等と同時にメンタルヘルス・チェックリストと体験活動・チェックリストについて量的な回答を求める測定を行い調査とすることとした。本研究（平成18年度研究課題）の中では体験活動充実感・チェックリストの回答をもとに、その各下位尺度がそれぞれ、どのメンタルヘルス・チェックリストの下位尺度に影響を与えるか検討を行う（図1の②）。

平成18年度は体験活動充実感・チェックリストおよびメンタルヘルス・チェックリストの作成と、因子分析をもととした下位尺度の構造の把握、因子間の関係の把握を第一の目的とする。

また、チェックリストにおいて通常の中学生群と適応指導教室通所児童生徒群のデータが平行して得られるため、この分布を比較することで両者の違いと中学生の不登校化のリスクまたは適応指導教室通所児童生徒の登校回復の可能性を把握できる指標づくりを模索することを第二の目的とする。

第三の目的として平成19年度以降、教育現場へのチェックリストの結果のフィードバック方法の模索と、教育現場にとってコストがかからず有益で、“できるだけ早く”フィードバックを行う体制作りのありかたを議論する（図1の③）。これらについては本研究における「今後の課題」で中心的に議論する。

上記の図1の②および③については体験活動や児童生徒の心理的健康の評価である結果をいかに把握するかを問題とする。それ以外にも特に、体験活動を企画・実施する教育現場からすれば「どのようにすれば児童生徒の体験活動の充実を確保できるか？」という方法論の参考情報に関するニーズは強いといえる。このようなニーズは体験活動の充実感の得点をもたらした体験活動の中身を分析することが必要であり、作文などの自由記述分析などを通じた質的な部分に注目する必要がある（図1の①）。これにはデータの確保や質的分析方法の確立など⁽³⁾、克服されていない問題が多いため平成19年度の課題とした。

方 法

チェックリスト作成の手続き

本研究は研究であるだけでなく、学校現場の教育活動全般において利用可能なチェックリストを作成することを目的とする。そのため、筆者とともに現

職小・中学校教師7名および指導主事3名ともに測定内容や仮説、質問紙の内容や項目の文章について個別に話し合いを行った。その結果、学校現場に日常での利用を可能にするため以下のような提言をうけた。

- A. 内容が簡潔で、実施に時間がかからないこと。
具体的には個別のチェックリストが「小テスト」程度の時間で特別活動等の授業時間や「帰りの会」などの一部で実施できること。
- B. 利用する教師に測定内容の概念や、その効果が理解可能で動機づけをもちやすい簡潔な説明ができること。また、それに基づいた報告書の理解が可能であること。また、Dとも関わるが誤解や偏見を受けかねない概念は極力廃すること。
- C. チェックリストを利用する中で結果や分析が多忙な現職教師にとって手間がかからず、容易に実施できること。
- D. チェックリストの内容や文面において抑うつやイライラ感など反社会性・非社会性につながりかねない刺激を与えないこと。特に、一部保護者には過敏ともいえるレベルの感覚でクレームを示す方もいるため、誤解の余地を極力なくすることが現場からの要望として強調して示された。
- E. 従来から行われている体験活動後の感想文などの自由記述と併用可能で、相互に質と量の分析を補完しあえるような工夫を図ること。

以上を満たすため先行研究における尺度や質問項目群を参照しつつ現職教師とともに質問項目の再編と文章の調整を行うことにした。その中で、以下に示すような極力明確で単純な仮説モデルの作成を行った。また、因子構造の項目数が統計上3項目以上であること（柳井，2000）を留意し参照するR度に基づいて各因子に3項目の質問項目を置く形でチェックリストの作成を行う。内容については質問項目の内容には現職教師と厳密に論議する形でチェックリストを作成した。これによりAやEは確保できるといえる。また、BやDについては以下にチェックリストを作成する際に文面に十分な検討と注意を払うことで対処する。Cなどについてはフィードバックの方法であり、今後の分析システムに関する問題であるため総合考察において検討を行い平成19年度の課題とした。

（1）体験活動充実感・チェックリスト

西田ら（2005）の「エンジョイメント尺度」を元にチェックリストを作成することとした。もともとエンジョイメントは運動やスポーツ、身体活動の充実をもとに心理的健康度の向上を説明するための仲介変数として定義されている（例えば、Berger &

Owen,1988；Kimiecik & Harris, 1996を参照)。そのため、体験活動の充実感測定には厳密には概念が異なるといえるため、チェックリストの名称自体を「体験活動充実感」とし、項目数と内容を簡素化することとした。

西田ら（2005）のエンジョイメント尺度は16項目からなる2因子構造で第一因子が組織キャンプにおける何かを成し遂げた充実感に関する項目が中心となっている「成就感」因子と、第二因子が組織キャンプの楽しさや退屈さの項目からなる「課題遂行の面白さ」因子から構成されている。この16項目を現職中学校教師4名、指導主事3名にそれぞれ示し、因子ごとに3項目となるように項目の内容を整理した。その結果、6項目からなる「体験活動充実感」チェックリストを作成した。

（2）メンタルヘルス・チェックリスト

中学生を対象とした心理的な健康度を測定する尺度は様々なものがある。その中で、岡安・高山（1999）の作成した「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）」は「不機嫌・怒り」と「抑うつ・不安」、「無気力」、「身体的反応」の4因子構造をとり宮崎県における7000部近いデータを基に構造の検討と他のストレス反応との関係の検討を通して妥当性が検証されているだけでなく、学校現場での実施も考慮におき得点の安全域と注意域を弁別できる得点の標準化されたパーセントスタイルも提案している。三浦（2006）はこれに加え、学校でのストレスやソーシャルサポート、さらにストレス反応として「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）」に不登校のリスクの高さを策定する「学校嫌い感情」に関する質問項目群も設け、ストレス・ストレス反応過程とともに年間の中学生を対象としたストレスマネジメント教育の実践を報告している。

本研究はストレスやソーシャルサポートを検証することを目的としなため、これらを割愛し「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト（簡易版）」に関する質問項目群を中心にストレス反応の高さを測定することとした。

現職中学校教師3名、指導主事1名とともに「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト」と「学校嫌い感情」質問項目群を再構成することとした。両者に重複する内容の質問項目を合わせるとともに、仮説上因子構造を「不機嫌・怒り」と「抑うつ・不安」、「無気力」、「身体的反応」さらに「学校嫌い感情」の5因子を仮定し各因子において3項目程度になるように内容の統廃合を行った。その結果、合計17項目からなる「メンタルヘルス・学校嫌い」チ

ェックリストを作成した。適応指導教室では「学校嫌い感情」と「身体的反応」を測定すること自体に難色を示されたため測定を行わなかった。そのため、Y中学校と適応指導教室の比較を議論する本稿では「不機嫌・怒り」と「抑うつ・不安」、「無気力」を中心に議論する。また、「不機嫌・怒り」や「抑うつ・不安」、「無気力」という表現も「刺激的」であるとして再考を求められたため、その後に因子名の工夫を行っている。

（3）調査用紙の構成

調査の実施においては上記の体験活動充実感・チェックリストとメンタルヘルス・チェックリストの合計15項目⁽⁴⁾をそれぞれ「◎」、「○」、「△」および「×」で回答を求め、それぞれ4点～1点で換算し測定することとした。

これに中学校および各適応指導教室で作成された自由記述欄を加え調査用紙とした。

結果と考察

（1）調査概要

Y中学校においては11月中旬に一週間行われた職場体験活動後の週明けに調査を実施した。その結果、111名の回答を得た。

適応指導教室においては県内の市立教育行政機関を通して各適応指導教室に依頼し、10月～2月までの間に合計のべ108部の回答を得た。

（2）下位尺度の構造の検討

合計219部をもとに因子分析（最尤解・プロマックス回転）を行った。体験活動充実感・チェックリストおよびメンタルヘルス・チェックリストそれぞれの結果を以下の表1、2.に示す。

表1. 「体験活動充実感・チェックリスト」の因子構造

因子Ⅰ＜楽しさ＞		
(5) いやな気持ちになった(逆)	0.71	0.22
(6) 退屈だった(逆)	0.69	0.35
(4) 何か他のことをしていたほうが良かったという気がした(逆)	0.55	0.32
因子Ⅱ＜達成感＞		
(2) 「やったあ」という気持ちが出てきた	0.21	0.98
(1) 元気がでてきた	0.15	0.75
(3) 何か得をした感じがした	0.32	0.56
因子相関		
	1	0.71
	0.71	1

西田ら（2005）の「課題遂行の面白さ」因子を構成する項目をもとに作成した項目が因子Ⅰとしてまとまったため、＜楽しさ＞因子と命名した。同じく西田ら（2005）の「成就感」因子を構成する項目が因子Ⅱにまとまったため＜達成感＞因子と命名した。因子Ⅰと因子Ⅱの間には比較的強い相関が認められる。

表2. 「メンタルヘルス・チェックリスト」の因子構造

因子Ⅰ<イライラ感>			
(3) 前よりイライラすることが減った(逆)	0.99	-0.10	0.01
(2) 前より怒ることが少なくなった(逆)	0.71	0.12	0.09
(1) 最近は嫌なことがあっても人と仲良くできる気がする(逆)	0.45	0.13	0.08
因子Ⅱ<情緒的安定性>			
(6) 前より自分が明るくなった	0.21	0.57	0.03
(5) 最近楽しい気分になれる	-0.11	0.55	-0.05
(4) 時々さみしく感じることがある(逆)	0.05	0.40	0.00
因子Ⅲ<やる気>			
(7) 最近いろんなことを頑張れるようになった	0.05	-0.09	0.85
(9) 前よりいろんなことに集中できるようになった	0.00	0.07	0.69
(8) 前より勉強が頑張れるようになった	0.21	-0.03	0.69
因子相関			
	1	0.25	-0.52
	0.25	1	0.32
	-0.52	0.32	1

岡安・高山(1999)において「不機嫌・怒り」因子を構成する項目をもととした項目が因子Ⅰにまとまった。そのため、<イライラ感>因子と命名した。そのため、得点の評価は内容を反映し逆転項目として扱うこととした。また、岡安・高山(1999)において「抑うつ・不安」因子と「無気力」因子がそれぞれ因子Ⅱと因子Ⅲにまとまった。そのため、それぞれ<情緒的安定性>と<やる気>因子と命名した。因子ⅠとⅡ、ⅡとⅢの間には弱い正の相関があり、因子ⅠとⅢの間には中程度の負の相関が存在した。

(3) チェックリスト間の影響過程の検討

共分散構造分析を用いたパス解析をもとに各因子間の影響過程を検討することとした。同一チェックリスト間では相関(共変量:双方向性のパス)に影響過程である「体験活動充実感・チェックリスト」から「メンタルヘルス・チェックリスト」間では因果関係のパスを仮定し $p<0.05$ で有意でないものはその都度取り外した上で再分析をかける手続きをとった。各因子の観測変数としては因子を構成する項目の合計得点を投入した。以上の手続きでY中学校群(図2)と適応指導教室群(図3)をそれぞれ分析した。

Y中学校群は<楽しさ>が<イライラ感>の抑制につながり、<達成感>が<イライラ感>の抑制とともに<情緒的安定>と<やる気>の確保につながっていることが明らかになった。また、<情緒的安定>

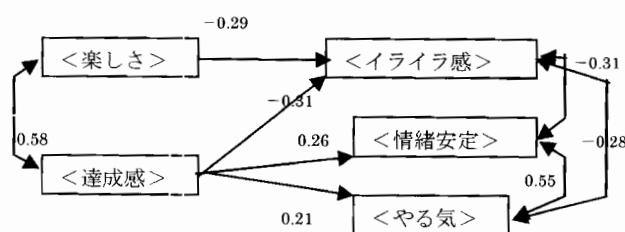


図2. Y中学校群の影響過程モデル

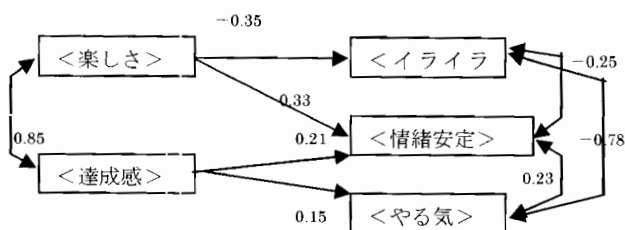


図3. 適応指導教室の影響過程モデル

と<やる気>との間には中程度の相関が見られた。

適応指導教室群においては<楽しさ>が<イライラ感>の抑制と<情緒的安定>の確保につながっており、<達成感>が<情緒的安定>と<やる気>の確保につながっていた。また、<イライラ感>と<やる気>には高い負の相関が認められた。また、<楽しさ>と<達成感>の間においても高い相関が認められた⁽⁵¹⁾。

(4) チェックリスト各因子の得点分布

次いで、「体験活動充実感」と「メンタルヘルス」の両チェックリストの回答得点分布を把握し、中学校群と適応指導教室群の得点比較を行う。通常このような度数分布を図示する際は棒グラフが一般的であるが、ここでは中学校群と適応指導教室群の比較を容易にするため折れ線グラフで示す。得点分布とt検定に基づいた得点の比較を表3に示す。

まず、「体験活動充実感」の<楽しさ>因子について見てみよう。得点の分布を折れ線グラフにしたものを図4に示す。

表3. 「体験活動充実感」・「メンタルヘルス」チェックリストにおける得点の分布と比較結果(t検定)

			1点	1.3点	1.6点	2点	2.3点	2.6点	3点	3.3点	3.6点	4点	平均・SD	t値
体験活動 充実感	楽しさ	中学校群	0	1	2	6	9	10	12	27	25	19	3.19(0.45)	5.42**
		適応指導群	4	5	18	10	8	8	19	10	12	14	2.63(0.73)	
	達成感	中学校群	0	1	3	9	10	12	13	14	21	28	3.16(0.51)	4.23*
		適応指導群	8	4	2	16	10	21	12	9	12	14	2.70(0.70)	
メンタル ヘルス	攻撃性	中学校群	12	7	9	32	21	15	8	4	3	0	1.63(0.53)	5.82**
		適応指導群	7	7	5	20	15	7	10	13	12	12	2.6(0.77)	
	情緒安定	中学校群	12	3	5	12	11	16	16	18	7	11	2.63(0.67)	3.29*
		適応指導群	7	7	11	7	29	26	15	3	2	1	2.15(0.51)	
	やる気	中学校群	8	12	3	13	11	25	10	15	3	11	2.51(0.62)	2.98*
		適応指導群	6	6	9	20	22	6	12	15	8	4	2.41(0.65)	

注) *: $p<0.05$, **: $p<0.01$ を示す。

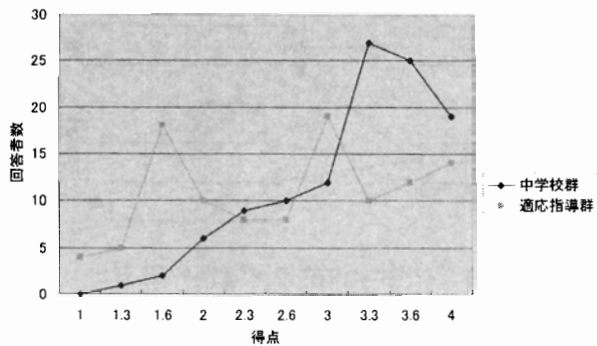


図4. 「体験活動充実感」＜楽しさ＞因子の分布

得点分布に注目すれば中学校群の方は＜楽しさ＞を強く感じる回答が高くなる傾向があり、適応指導教室群は＜楽しさ＞に若干ポジティブな回答と若干ネガティブな回答にそれぞれ山がある傾向が見られた。

t検定における平均の比較上も中学校群の方が有意に得点が高いことが示された。

中学校群は職場体験の活動であり、適応指導教室のように＜楽しさ＞を重視した活動ではないもののこのような結果が示されたことは、適応指導教室通所生徒の体験活動への“盛り上がりにくさ”が示されたものといえよう。

「体験活動充実感」の＜達成感＞因子について見てみよう。

得点の分布を折れ線グラフにしたものを図5に示す。

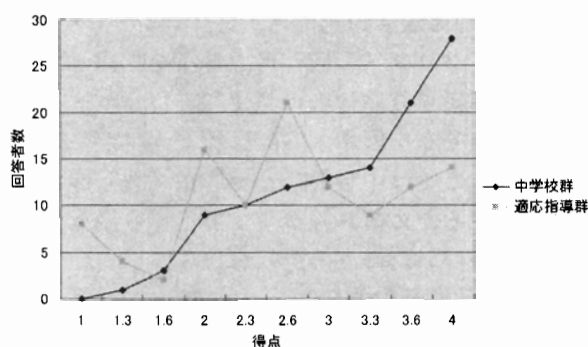


図5. 「体験活動充実感」＜達成感＞因子の分布

中学校は＜楽しさ＞と同様に＜達成感＞を強く感じる傾向がある一方で、適応指導教室群は“どちらでもない”といえる中間に比較的得点が集中する傾向が確認できた。

t検定における平均得点比較においても中学校群の方が適応指導教室群より得点が高いことが明らかにされた。

もともと＜楽しさ＞を重視して企画される適応指導教室の体験活動に比べ、中学校における職場体験

は様々な苦勞を乗り越えることに主眼が置かれているため、この結果はもともと予想できる結果であったといえよう。

「メンタルヘルス」の＜イライラ感＞因子について見てみよう。

得点の分布を折れ線グラフにしたものを図6に示す。

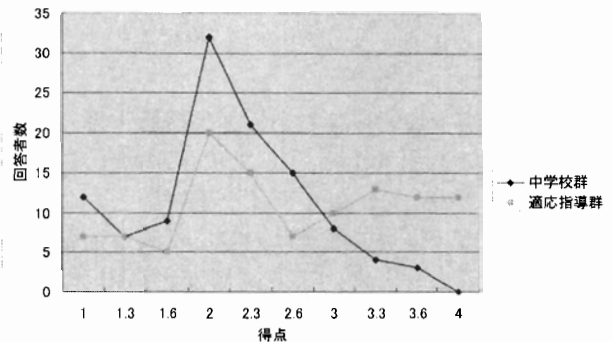


図6. 「メンタルヘルス」＜イライラ感＞因子の分布

＜イライラ感＞因子については中学校群では若干＜イライラ感＞を否定する回答に山があり、適応指導教室群は比較的回答が分散する傾向が示された。適応指導教室群の＜イライラ感＞を肯定したといえる3点以上の回答者は全体の4割を超えており適応指導教室群の＜イライラ感＞が意外に高いことがわかる。

t検定における平均の比較においても適応指導教室群の方が中学校群より得点の高さが示された。

「メンタルヘルス」の＜情緒的安定＞因子について見てみよう。

得点の分布を折れ線グラフにしたものを図7に示す。

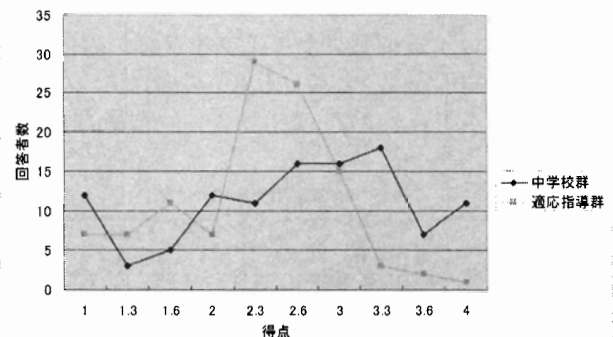


図7. 「メンタルヘルス」＜情緒的安定＞因子の分布

もともと＜情緒的安定＞は“神経症傾向”を逆転項目化し刺激の少ない文面を意図して測定をおこな

った概念である。適応指導教室群では“どちらでもない”という回答に得点が集中する傾向が示された一方で、中学校群は得点が広く分布する傾向が見られる。

t 検定においても有意に中学校群の方が適応指導教室群より得点が高いことが示された。分布を見ても＜情緒的安定＞性が否定されたといえる2点以下の回答者は中学校群と適応指導教室群であまり割合に差はないが、＜情緒的安定＞性を肯定した回答は中学校群が49%、適応指導教室群が12%と明らかに中学校群が多い。

いわゆる「神経症型不登校」の問題がこのような適応指導教室群の得点に影響したといえるが、中学校群でも同様に＜情緒的安定性＞の低い群が生じていることには留意する必要がある。

「メンタルヘルス」の＜やる気＞因子について見てみよう。

得点の分布を折れ線グラフにしたものを図8に示す。

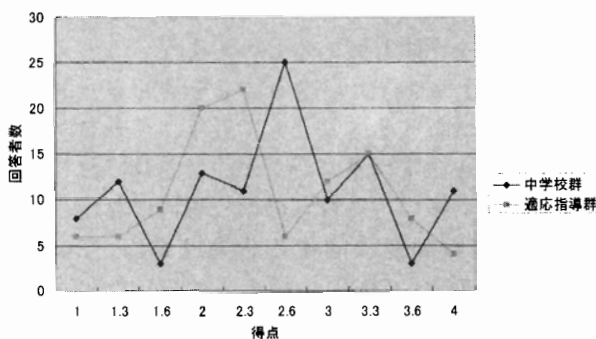


図8. 「メンタルヘルス」＜やる気＞因子の分布

全体として中学校群も適応指導教室群も得点に散らばりが大きいことが分かる。その中で、若干中学校群の方が高い得点に分布が偏る傾向が見られる。

実際にt 検定においても中学校群の方が適応指導教室群より得点が高いことが示された。

総合考察

(1) 体験活動充実感のメンタルヘルスへの影響

まず、具体的な影響過程の結果について見てみよう。中学校群では＜楽しさ＞は＜イライラ感＞を抑制するだけであったが、＜達成感＞は＜イライラ感＞と＜情緒的安定感＞、＜やる気＞につながっていた。一方、適応指導教室群では＜楽しさ＞が＜イライラ感＞と＜情緒的安定＞につながっており、＜達成感＞が＜情緒的安定＞と＜やる気＞につながっていた。

この両群の違いはメンタルヘルスの確保やその一

つの悪化の形態といえる不登校に関してはストレスの“予防”やメンタルヘルスの安定のための“教育（能力開発）”を受ける中学生と、不登校などによる“治療”的指導が必要な不登校状態の適応指導教室通所者の違いが現れているといえよう。

一方で通常の中学生にとっては発達段階なども視野に入れ＜楽しさ＞よりも＜達成感＞の影響力は強く、本研究では検討していない職場体験を通じた進路面での発達や能力開発の効果（注釈の4の図を参照されたい）は別にしても、心理的な健康に資する部分も高いことが明らかになった。

(2) 分布の比較とフィードバック方法の課題

各因子の得点分布で見たように、Y中学校群と比べ適応指導教室群は多くの因子において充実感やメンタルヘルスが低い回答をする傾向があり、不登校状態が通常よりメンタルヘルスが悪化しやすく、体験活動の“盛り上がり”も欠けやすいことが示されたといえよう。

このことは、中学校側から「メンタルヘルス・チェックリスト」の利用方法を考えれば、適応指導教室の回答者に近い回答をする生徒は不登校のリスクが高いことを示すものとして把握し予防的なケアの必要性を理解するきっかけにすることができる。一方、適応指導教室側からすれば通常の中学生レベルの得点にもとれば“登校が回復できる状態”に近づいたと把握し、この得点の回復を経営目標の一つにおいて利用することができよう。

ところで、SSN研究における適応指導教室の担当者を変えた研究検討会では適応指導教室通所者に一定数の軽度発達障害に関わる生徒がいることが指摘され通常の中学生との比較上の問題や質問紙回答時の理解の状態など得点に留意する必要性とともに特に質問紙や報告書などにおいて誤解や偏見を受ける余地がないよう注意する必要性が指摘された。つまり中学生と適応指導教室通所者は別の属性であるため、両者の質的違いの検討こそ今後の課題といえよう。また、本研究においては基本的に適応指導教室通所者である以上、当該チェックリストによる分析対象とすることに問題はないといえるものの、参与観察などを通して軽度発達障害を持つ適応指導教室通所者や不登校生徒の対応のあり方などについては特別の測定方法や介入のあり方を論議する必要があるといえるのかもしれない。

現状ではそれぞれ100程度ずつのデータ数であるため厳密な設定は行えないが、「メンタルヘルス・チェックリスト」のフィードバックの方法として「安全域」と「注意域」を点数として設定すれば実用的な有益性が増すように思われる。

また、年に一度きりという使用だけではなく、学期末やある程度大きな体験活動などのイベントごとに本研究で作成したようなチェックリストを実施すれば教育現場にとって有効なチェックリストの利用ができるといえよう。

(3) 学校評価・教師評価の指標の一つとしての利用

中学校群も適応指導教室群も体験活動の充実感がおおむねメンタルヘルスの改善に有意な影響を与えていることが明らかになった。つまり、体験活動に充実感を得られれば、その効用として“切れやすさ”や“イライラ”や「神経症型不登校」の原因である情緒の不安定さ、怠学傾向や無気力などの予防が確保できるといえる。これらのことから体験活動の教育課程の評価の一つとし“楽しい”、“達成感がある”ことを指標とすることもできるといえよう。

そのため、本研究が作成した「メンタルヘルス」チェックリストについては特別活動や進路教育に関わる活動、さらに適応指導教室の様々な体験活動の成果を量的に評価する指標の一つにすることが可能であろう。

加えて、「メンタルヘルス」チェックリストについては適応指導教室群と中学校群の差が示されたことからそれぞれの組織にとって安定した心理状態という教育目標の一つとなる量的測定可能な指標に設定し得るといえる。

今後はこれらの指標の他の要因などとの影響関係の情報を集めた上で、学校現場で理解しやすく、これらの評価作業の中で利用しやすい報告書や運用システムの開発が課題となるといえる。

(4) 今後の分析課題

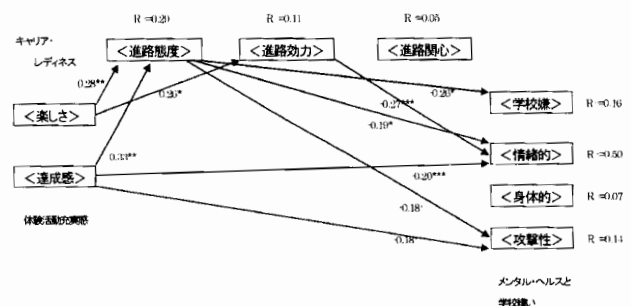
本研究ではチェックリストの作成とその統計的メカニズムの検討という実証的部分についてはある程度議論が行えた。一方、フィードバックの方法やデータ処理の体制のあり方についてはあくまで見通しの段階であり今後の実践による裏づけと改善が課題として残されている。これらは実証や科学では割り切れない部分も多く今後の研究としてもあり方を工夫する必要があるといえよう。また、同様に実証や科学的分析が難しい部分として図1の①に示したような自由記述の分析を基とした望ましい体験活動の質的概要を整理する方法論と分析、考察が平成19年度以降の課題として残されている。自由記述分析ではデータ入力と分析処理などの課題のほかに、膨大なデータ数を前提とする点や結果が必ずしも示されにくいなどの研究上の課題が多い⁽⁷⁾。これらをいかに学校現場に有益なものとしてまとめていくか十分に吟味する必要がある。

一方、数量的に把握する上での課題としては先に

示した「危険域」や「安全域」の設定を今後データの蓄積の上で設定していくことが挙げられる。加えて、従来は臨床的またはケース分析的に「神経症型」や「怠学型」などとされてきた不登校の分類や類型化とこれらのチェックリストに示された因子の特徴がどの程度関連を持つといえるのかを検討する必要がある。これは、「メンタルヘルス」チェックリストにおいて基準関連妥当性の検討といえるものである。

【注釈】

- (1) 詳しくは、わが国の児童生徒向けの心理的諸先行研究の各尺度を学校現場での利用可能性と実効性の側面から整理し議論した高木・田中(2004)を参照されたい。
- (2) 平成17年と平成18年に筆者の別の研究と筆者の協力研究においてこの尺度を含んだ質問紙の協力を岡山下の小・中学校合計12校に依頼したところ9校から本文に指摘した厳しい意見をもとに協力を拒否されている。このことは少なくとも岡山県内の教育現場において「中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)」を利用しにくいことを示唆しているといえよう。
- (3) 質的分析や自由記述の結果を量的データなどと繋げて分析する方法として近年、データマイニングやテキストマイニングが注目されており興味深い議論も多い。これらの学校現場における研究手法や実践課題に関する議論は露口(2006; 2007)や熊丸(2006)、杉本(2007)など近年教育経営学分野の学校評価を意識した研究で成果が報告されている。
- (4) Y中学校においてはキャリア教育に関わる調査であるとともに、不登校リスクも参照する必要があるため、「キャリア・レディネス・チェックリスト」(19項目)と「学校嫌い感情・チェックリスト」(8項目)を加えて質問紙を作成している。Y中学校だけの体験活動充実感・キャリアレディネス・メンタルヘルス過程モデルの検討結果は以下の通りである。



「体験活動充実感」と「キャリア・レディネス」の「メンタルヘルス・学校嫌い」への影響

この図からわかるように、中学生の職場体験活動においては「体験活動充実感・チェックリスト」の＜楽しさ＞は進路に関する前向きな心理や態度（キャリア・レディネス）の発達をもたらし、それを通して間接的にメンタルヘルスの改善や学校嫌い感情の抑制につながる一方で、＜達成感＞は調節メンタルヘルスの改善と学校嫌い感情の抑制をもたらすことが明らかにされたといえる。

(5) 本研究の研究目的からは少し離れるが、このことから適応指導教室通所児童生徒の心理的状态は無気力・攻撃型と抑うつ型に分かれることを示唆しているといえよう。クラスター分析により検討を行った場合も同様の項目がまとまって提示されている。

(6) すでに(4)で取り上げたように「キャリア・レディネス」の側面でいえば進学や将来の職業などの進路への前向きな態度（具体的な考え方や行動）の形成である＜進路態度＞には＜達成感＞が影響を与えている。また、＜楽しさ＞は＜進路態度＞とともに、進路に関する努力や行動が報われるという前向きな気持ちである＜進路効力感＞にも影響を与えている。

(7) 杉本(2007)におけるポスター発表の際に杉本英晴氏に伺ったところ、Word Minerなどの最新の文章分析ソフトを用いても文節や文脈の意味の確認をその都度行う必要があるため、字数と人数が増えることで急激に分析の困難さが増すことが指摘された。杉本氏の見解として一人50字程度で200人分のデータが限界とされている。これに加えて、文章をデータとして入力する労力も無視はできないであろう。今後の質的分析を行う際は利用ソフトと質問紙の字数を一定に制限するなどによる省力化と文脈の適切な把握をはかる必要がある。

【付記】

本研究は第一執筆者の指導のもと、岡山県の実験研修の最前線に立つ第三執筆者と現職教員である第四執筆者との協議を基に第二執筆者が作成した。

調査の実施にあたり生徒と通所児童生徒のために協力していただいた現場の教職員の皆さんに心よりお礼申し上げます。

【引用文献】

Berger, B. G. Owen, D. R. 1988 Stress reduction and mood enhancement in four exercise modes. *Research Quarterly for Exercise and Sport* 59,

148-159.

飯田稔・井村仁・影山義光 1988 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容 筑波大学体育化学系紀要, 11, 79-86.

熊丸真太郎 2006 学校独自性の認識に関する研究—テキストマイニングに関する質問紙分析から— 日本教育経営学会第46回大会発表要旨集録 38 および同発表配布資料.

三浦正江 2006 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討—不登校の予防といった視点から— 教育心理学研究, 54, 124-134.

Kimiecik, J. C., & Harris, A. T. 1996 What is enjoyment? A conceptual/ definitional analysis with implications for sport and exercise psychology. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 18, 247-263.

西田順一・橋本公雄・柳敏晴・馬場亜紗子 2005 組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル—エンジョイメントを媒介とした検討— 教育心理学研究, 53, 196-208.

岡安孝弘・高山巖 1999 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト(簡易版)の作成 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター研究紀要, 6, 73-84.

坂柳恒夫 1991 進路成熟の測定と研究課題 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 15, 269-280.

坂柳恒夫・竹内登規男 1986 進路成熟度尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告, 35(教育科学編), 169-182.

佐々木万丈 2001 中学生用体育学習ストレスコーピング尺度(SCS-PE)の開発と標準化 教育心理学研究, 49, 69-81.

神藤貴昭 1998 中学生の学業ストレスと対処法略がストレス反応および自己成長感・学業意欲に与える影響 教育心理学研究, 46, 442-451.

杉本英晴 2007 テキストマイニングによる大学生の「就職しないこと」イメージ 日本教育心理学会第49回総会発表論文集 151. および同発表配布資料.

高木亮・田中宏二 2004 問題行動に対処する学校システムの研究動向 適応障害の包括的支援システムの構築 ナカニシヤ出版 47-72.

露口健司 2006 学校組織におけるデータマイニングシステムの構築の臨床的アプローチ 日本教育

- 経営学会第46回大会発表要旨集録 39. および同発表配付資料.
- 露口健司 2007 教育経営研究に於ける有用性の探究—学校組織におけるデータマイニング実践を事例として— 日本教育経営学会第47回大会発表配布資料.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造 名古屋大学教育学部紀要, 33, 63-68.
- 柳井晴夫 2000 因子分析法をめぐる問題点を中心にして 教育心理学年報, 39, 96-108.